

教えて！先生 日本人形の衣裳にとことん迫る 〳特別編〳

ご質問にお答えします

日本人形の衣裳にとことん迫る本企画。人形の衣裳に使われている文様や生地はもちろん、着せ方についても詳しく解説していきます。今回は番外編として、金襴織物に関する質問に株式会社誉勤商店の松井幸生社長がお答えします。商戦でのセールストークにお役立てください！
※下記回答は、誉勤商店独自の製法です



Q 金襴織物ができるまでの時間は？

A ご注文を頂いてから大体3～4カ月かかります。このうち糸を染めて整経するまでの時間が2～2.5カ月。その糸を織機にかけて生地を製造するのが約10日。ただ現在は工場や職人がどんどん減っていて、発注できる織場が少なくなって4カ月以上を要する場合があります。

Q 人形用の織物を作る際に、どのようなことに気を付けています？

A 言葉で表現することは難しいのですが、生地の「風合い」「光沢」を大事にしています。お人形であれば飾ったときに輝きがきれいに見えるか。生地の毛羽立ち具合はどうか。仕上がりのことを一番に考えてものづくりをしています。使用される用途によって、織物の設定は異なります。例えば、お人形の衣裳や和小物、お茶道具の名物裂の仕覆や袱紗といったものは手にとって近くで見ます。そのため細かく緻密に織る必要があります。とりわけ人形に使用する生地は近くで見て、生地の良さを感じていただけるように表現しなければいけないと思っています。例えば葉っぱの文様の場合、葉脈や葉の先まできれいに見えるよう、織物のタテ糸とヨコ糸の密度を上げています。細く柔軟な絹糸だからなせる業で、色艶、光沢があるからこと表現できるのです。過去の織物や裂地から刺激を受け、色や文様のデザインを考えます。トレンドも大変重要です。

Q 絹金襴織物を作る松井さんのこだわりは？

A いろいろなことを考えて人形用の織物を作りますが、大きく二つあります。一つは文様のサイズです。皆さんご存知の通り、お人形のサイズはどんどん小さくなっていますから、織物を作る際は文様のサイズに大変気を配ります。例えば、鳥の柄を入れたいとする。その大きさは小さければ小さいほどクライアントは良いと思っています。「1円玉の中に2羽入るように配置してほしい」と要望があったとします。これはとても厳しい。入らないことはないのですが、細かくすることで、その柄が何か分からなくなってしまう場合がある。柄が何か分かるのは当然のこと、きれいに見えるようにするのも仕事です。もう一つは生地の厚さです。織物を木目込み人形に使うのか、衣裳着人形に使うのか。それだけでも生地の選び方は変わってきます。木目込み人形は生地厚が若干薄い方が「仕事がしやすい」と言われています。ただ薄すぎるのはNG。なぜならば、木目込み人形のボディは桐塑という素材でできていて、その材質の質感が悪目立ちしてしまうからです。一方、衣裳着人形はある程度の厚みや固さが必要とされています。生地を何枚か重ねて着せ付けをするため、下に着ている生地の色が透けてしまわないような厚さが必要なのです。それと柔らかすぎる生地の場合、人形に着せ付ける前に生地に糊を貼って「貼り感」を出す必要が出てきますので、中には糊を貼る方もいます。このように、こだわりはいろいろとありますが、できる限り、注文してくださるメーカーさんの要望に沿った生地を提供できるように努めています。

Q 誉勤商店で扱っている金襴織物とはどのような形で使われることが多いですか？また、金襴織物ができるまでの過程を教えてください。

A 当社では僧侶が身に着ける袈裟をはじめ、装束、和小物に使われる金襴織物を製造・販売しています。中でも一番多いのが節句人形に着せる衣裳の生地です。「金襴織物を何に使用するのか？」というところから生地作りはスタートします。人形用の衣裳と人間が着る衣裳とでは文様の大きさが異なりますから、こういったものに生地が使われるのかが大事になってくるのです。この記事は多くの人形屋さんが読んでくださっていると思いますので、人形用に作る金襴織物の過程をご紹介します。

▼人形メーカーからご要望がある時

①ヒアリング

柄（文様）のパターン、色、そして風合い（どういった見え方を希望するのか）をお聞きします。

②デザイン案を提出

ヒアリングを元に「紋屋」と呼ばれる職人と打ち合わせを重ねて図案をかためていき、紋様のカラープリントを作ります。

③カラープリントの確認

メーカーさんと生地のデザインについて何度か細かいやり取りをし、デザインを決めていく大事な工程となります。当社の現物の生地を見ていただき、デザインと照らし合わせ、クライアントがイメージするデザインに近づけていきます。

④織機のスペックに合わせた紋型を製作する

クライアントの要望に合わせて、カラープリントで文様の柄やサイズ、無地場（柄がない部分）などのバランスを再度確認します。そのデザインを元に織機（織物を織る機械のことで「おりき」「しょっき」と呼ぶ）に合わせた紋型を作ります。

⑤糸の仕様を織場に指示

織場に紋型を渡すと同時に使う糸について細かく指示を出します。どの太さの糸を使うか、また生地の密度を変更するなどして、色や風合いを決めていきます。

◆ポイント 箔や金糸の色と太さを織場に指示するとき、紋型を確認するためにその時、織機にかかっているタテ糸で試し織りをします。その結果、風合いが思っていたものと異なるようであれば糸を変えるなどして調整します。

⑥タテ糸とヨコ糸を色染屋に注文

当社で扱う正絹は注文ごとに糸を染めています。正絹は蚕からできる天然素材ゆえに季節や天候などで染まり方が違ってきます。前回と同じお色味をご希望のお客様にご満足いただけるよう、調整して染めています。注文した色がしっかり染められているかを確認して的確に指示するのが私の大事な仕事の一つです。

◆ポイント タテ糸とヨコ糸の仕様は異なります。染め上がった糸はそのまま使えるわけではなく、タテ糸

は「整経屋」と呼ばれる職人をお願いして織機に合わせて整経してもらいます（経糸を整えると書いて整経）。織機は種類がありスペックが異なります。そのため使用する織機に合わせて、タテ糸を整える必要があるのです。

⑦配色パターンを決める

ここまで来たら、文様の細部まで配色を決めます。パターンを複数作ってみて、最終的に配色パターンを1つに絞ります。各部分の色糸を織場に指示し、整経された糸を織機にかけ、配色パターンに合わせた見本織をし、クライアントにお見せして、再度クライアントの指示を仰ぎます。

▼誉勤商店オリジナルデザインの時

①デザイン

有職文様を作りたいときは有職故実などの資料を参考にしながら、文様のデザインを決めていきます。平安時代の文様を再現するのは並大抵のことではありませんので、苦勞するところです。文様の柄を縮小したり、拡大したり、切り貼りしてデザインを固めていきます。※メーカーさんから要望があるときの製造工程と異なるのは、主にデザインの部分。②以降の工程はメーカーさんから要望があるときの製造工程とほぼ同じ



上)糸を染める作業。
下)ヨコ糸の下仕事。
染めた糸を織機に合わせて使えるようにする。分業制でそれぞれ職人がいる

画像提供：株式会社誉勤商店